

教員の反省と学生の反省

教育心理 佐藤公代

< 問題と目的 >

教員養成課程 1 回生対象の「発達と学習」を分析する。

仮説は次の通りである。

(1) 毎回書かせる講義形式なので学生にはつまらなく感じることもあるだろう。

(2) 講義内容については、基礎的な事柄を項目毎にやっているので教採にも日常生活にも役立つであろう。

< 方法 >

1) 期日：2008年2月1日(金)に調査した。

2) 対象者：1回生～4回生 126名
(回収率99%)

3) 手続き：自作のアンケートで無記名により調査し分析した。

< 結果と考察 >

アンケートにそって分析結果を述べる。

(1) 授業は「非常に楽しかった」2%、「楽しかった」24%、「どちらでもない」36%、「つまらなかった」29%、「非常につまらなかった」9%である。「楽しかった」のは26%、「つまらなかった」のは38%で、つまらないと回答した方が多かった。

(2) 授業は「非常に役だった」8%、「役だった」57%、「どちらでもない」26%、「役立たなかった」7%、「全く役立たなかった」2%である。「役だった」のは65%、「役立たなかった」のは9%で、役だったと回答した方が多かった。

(3) 発達と学習を「もっと勉強したい」1%、「勉強したい」45%、「どちらでもない」32%、「勉強したくない」10%、「全く勉強したくない」2%である。「勉強したい」のは46%、「勉強したくない」のは12%で、勉強したいと回答した方が多かった。

(4) 毎回書くことについて「非常に難しかった」14%、「難しかった」56%、「どちらでもない」26%、「易しかった」

3%、「非常に易しかった」1%である。「難しかった」のは70%、「易しかった」のは4%で、圧倒的に「難しかった」と回答した方が多かった。毎回、書かせている内容は、講義内容が理解できたかどうかを見るために、基本概念を用いて考えさせる課題である。毎回テストをやっているような感覚で学生にとっては確かにつまらなく思うのであろう。

(5) 出欠、遅刻について、無断欠席、無断遅刻は「全くない」28%、「ない」11%、「わからない」%、「ある」53%、「非常にある」4%である。「ない」のは39%、「ある」のは57%で、あると回答した方が多かった。後期、金曜日の1時限ということもあり、さらにつまらないということもあって、無断欠席、無断遅刻は多くなることは確かである。必修で100人以上の授業に関しては、1時限を避ける時間割になればいいかと常々思っている。後期の寒い時期でもあるので、筆者は8時に大講義室に行き、学生が入ってくる時には部屋を暖めてあげようという配慮のもと、学務から鍵をかりて、8時15分頃からエアコン操作をするのである。電気代が気になるが、それよりも学生の寒がりの方に目がいってしまう。

(6) テストについて「非常に不安である」54%、「不安である」42%、「どちらでもない」2%、「不安はない」1%、「全く不安はない」1%である。「不安である」のは96%、「不安はない」のは2%で、不安であると回答したのはほとんどである。授業中真面目に聞いている学生にとっては、テストはお手の物であるだろう。テストの傾向を数回述べているので、それにそって勉強してきたかどうかで採点はできるようになっている。

(7) レポートについて「非常に不安である」10%、「不安である」50%、「どちらでもない」24%、「不安はない」1

3%、「全く不安はない」3%である。「不安である」のは60%、「不安はない」のは16%で、テストほどではないが、不安であると回答した方が多かった。レポートは具体的な事例に基づいて書かせているので書きやすかったのかも知れない。抽象的、哲学的な課題にするとインターネットで貼り付けてくる学生もいるので、考える力をみるには不適切な課題だと思う。本人にしか書けない本人独自のレポートとなると、否が応でも自分の発達や教師像などを考えざるを得なくなるだろう。

(8)自由記述欄には24%の学生が書いた。その内訳は次の通りである。「先生のステキな人格はわかるのですが、もう少し学生の身になってお話しをしてはどうでしょうか。レポートは出席をしっかりとしていれば、先生は大目にみるのですか。それは差別ではないでしょうか」「生徒を疑いの目で見ていて辛かったです。」に対しては、大きな誤解が生まれている。3分の2以上の出席を前提にテストとレポートで採点するのであるが、毎回の小テスト(毎回書かせていること)できちんと書いている学生は、レポートでもきちんとしてくることは経験上わかっていたので、それを言っただけであるのが上手く伝わっていなかったのであろう。さらに、学生の身になって話していたはずであるが、逆に取られると言うことは、話し方に何か違いが生じたのかも知れない。出欠代わりの書く紙を渡すときにズレが生じていたのであろう。教員と学生との信頼関係ができていないと、このようなことが起きるので、まず、信頼関係の築き方を身につけなければならない。「先生の授業があれば、是非取りたいと思います。有り難うございました。」「とても自分の糧となり、今後の生活、勉強に役に立つと思う。プリントもとても大切なことが書いてあり、役立つと思うのでとっておきたい。楽しい講義でした。」「先生の一生懸命説明する姿を見習いたいです。」「とても勉強になりました。今日のお話しには、レポートの提出期限のことなど人として当たり前のことを教えてもらいました。授業とは関係ありませんが、とても大切なことだと思いました」「心理に関する新聞記事を読むのが面白かったです」

に対して、救われた気がした。その他に、「講義の声が聞こえにくかった」「マイクをもっと近づけてもらいたかったです。工事の声で聞こえなかったのに関しては、もともと声が小さいのでマイクを使っているが、ボリュームの調整などきめ細かい配慮が必要であった。」「先生の話すだけの授業はやめた方が良いでしょう」というアドバイスを受けたが、筆者としては、今のところ、講義以外の授業を考えていないが、何か、青年期の特徴としての検査法なり、した方が興味がわくのかも知れない。その反面、「ビデオや資料など内容を理解しやすい教材が使用されていて分かりやすかったです」という意見もあり、受け取り方に個人差があり、「適性処遇交互作用」を考えながら全員に行き渡る講義をしなければならないので大変ではあるが、何とか学生の希望にかなえるような授業にしたい。「私、受けたくてこの授業受けたんじゃないんだからね。--でもー楽しかったわよ」と言われると、筆者も受講したい人だけ受講してと言いたいが、教員養成課程にとっては必修なので、どのような学生にも興味をもたせて受講させなければならない。今回、筆者は信頼関係を上手く築けたと思っていたが、学生からは、「自分の考えを絶対視している」「なまりをきいていると不快になる」「嫌みを言われているようだ」「疑われているみたい」「理解させる方法の研究をしたらどうか」などと筆者としては、思っても見なかったことが飛び出してきてびっくりしているのである。「寛容の誤謬」ではなく、「厳格の誤謬」が飛び出すと言うことは、学生からの信頼がないことであり、一部の学生としてもなくさなければならないことである。今後の課題としたい。以上、仮説(1)(2)は支持された。教員の反省として、毎回書かせる課題をもう少し易しくすることと、無断遅刻、無断欠席をさせない工夫が必要であること、である。学生の反省として、教員養成課程の学生としての自覚をもち、日常生活の規則正しい生活の確立をめざすことである。学生の中には、教員には厳しいことを突きつけながら、自分の行動には無頓着なものもいて、矛盾に気づかせることも大事であらう。